研究主題「知的障害特別支援学校 中学部・美術科における見方や感じ方を生かす指導の工夫 －表現と鑑賞が相互に関連した学びを通して－」

東京都教職員研修センター研修部教育経営課
都立城東特別支援学校　主任教諭　三上　宗佑

第１　研究のねらい

特別支援学校学習指導要領解説各教科等編（小学部・中学部）（平成 30 年３月）より、美術科の造形的な見方・考え方は「表現及び鑑賞の活動を通して、よさや美しさなどの価値や心情などを感じ取る力である感性や、想像力を働かせ、対象や事象を、造形的な視点で捉え、自分としての価値や意味をつくりだすこと」である。また、美術科の内容である「Ｂ鑑賞」は、「生徒が自分の感覚や体験などを基に、自分たちの作品や美術作品などを見たり、自分の見方や感じ方を深めたりする活動を通して、「思考力、判断力、表現力」の育成を目指すものである。」と示されている。しかし、所属校での授業等を通し、知的障害特別支援学校の美術科においては表現の指導が中心的であり、「見方や感じ方」を生かし深めるような鑑賞の指導については課題があると感じていた。

本研究では、知的障害特別支援学校中学部の生徒が、自己と他者の「造形的な見方・感じ方」を生かし、「造形的な見方・考え方」を働かせ、美術の作品作りで豊かな表現ができることをねらいとする。その実現に向け、鑑賞の活動を充実させた上で、表現と鑑賞を関連付けた授業構成の工夫を提示する。

第２　研究仮説

美術科の表現と鑑賞の活動において、「造形的な視点」を意識できる教材等や指導の工夫を行い、表現と鑑賞が相互に関連した学びを実践することで、生徒が造形的な見方や感じ方を生かし、美術の作品作りでより豊かな表現ができるようになるであろう。

第３　研究の内容と方法

１　基礎研究

(1)「美術科の内容構成」の把握

特別支援学校学習指導要領解説各教科等編（平成 30 年３月）を基に把握した。

- 美術の内容は「Ａ表現」、「Ｂ鑑賞」と〔共通事項〕から構成され、それぞれが相互に関連することが求められている。
- 「造形的な見方・考え方」を身に付けるためには、「対象を見る」、「対象の造形的な特徴を感じ捉える」、「表したいことを考える」、「表し方を考えて表す」、ことを表現と鑑賞の中で繰り返し行い、発展させていく必要がある。

(2)「生徒の実態」の把握

ア　知的障害・自閉症に対する指導の留意点

教育支援資料(平成 25 年 10 月文部科学省初等中等教育局特別支援教育課)「Ⅲ 知的障害」と「Ⅷ 自閉症」を基にし、特性を踏まえた指導・支援を行う。

イ　絵画による認知発達の把握

グッドイナフ人物画知能検査や、ローウェンフェルドの絵画の発達段階の理論を活用し、生徒の絵画における発達を読み取り、実態に合った指導・支援を選択する。

(3) 「授業づくりの工夫」

幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）（平成 28 年 12 月 21 日 中央教育審議会）を基にして二つの工夫点についてまとめた。

- 表現や鑑賞を交互に行ったり、完成した作品を展示したり鑑賞したりする多様な学習ができる題材設定を行う。
- 写真による記録や作品作りの「振り返りシート（ポートフォリオ）」（以下「振り返りシート（ＰＦ）」と表記）を活用して、生徒の学びの変容を評価する。

２　調査研究

都立知的障害特別支援学校の中学部で美術を指導する教員 61 名と、所属校の生徒 25 名を対象に、鑑賞の指導に関する調査を実施し、結果を分析した。

(1) 鑑賞の指導における課題意識のある事項について（教員対象アンケートより）

「生徒の興味・関心を鑑賞する作品に向けること」について 89％の教員が、「表現と鑑賞の関連付けの方法」について 85％の教員が知りたい事項であることが分かった。この二つの事項を鑑賞の指導上の要旨と捉え、本研究でその方法を提示する。

(2) 鑑賞に関わる生徒への意識調査と考察（生徒対象アンケートより）

美術作品の形や色に着目して見るということについて、関心の低さが見られた。この結果から、本研究における題材で造形的な要素（形や色、光等）に着目して素材等に触れる経験を積み、形や色への興味・関心を高める。

３　開発研究

(1) 「造形的な見方・感じ方」を生かした指導の工夫（図１、表１）

題材を導入、展開、まとめの３場面で構成し、各場面で表現と鑑賞を相互に関連させる。

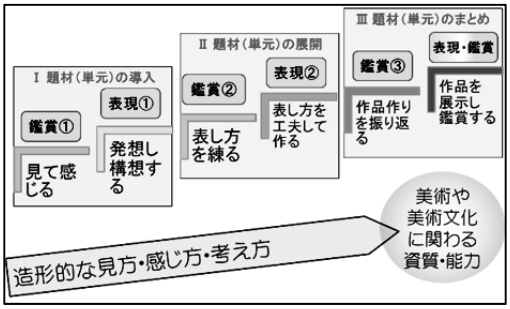


図１　豊かな表現につながる学習方法

表１　豊かな表現につながる学習方法

導入場面
○鑑賞①で参考作品等の見方・感じ方や制作の技法等を学ぶ。 ○表現①で発想し、構想しながら試作品作りをする。
展開場面
○鑑賞②で自他の試作品を見て、感じたことを基に、「振り返りシート（ＰＦ）」を活用して完成作品の制作に向けた構想を練る。 ○表現②で、表し方を工夫して作品の完成を目指す。
まとめの場面
○鑑賞③で、完成作品を振り返り、「振り返りシート（ＰＦ）」に頑張ったことをまとめ、発表する。 ○表現・鑑賞で、作品の展示を行い、展示した作品を味わう。

(2) 「造形的な見方・感じ方」を広げ深め、「考え方」へとつなぐ視覚支援教材

- 作品等の造形的な要素に着目し、造形的な視点に対する興味・関心を高める（**図２**）。
- 動画や表を提示して、生徒が見通しをもって主体的に活動ができるようにする（**図３**）。
- 友達の作品の形や色に注目する鑑賞用スライドから自己の表現へと生かす（**図４**）。
- 展示場所や展示方法が分かる動画や写真を活用し、展示への発想を促す（**図５**）。

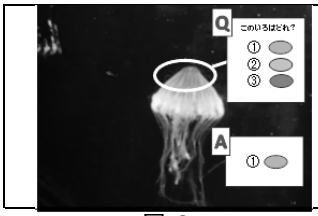


図２

図３

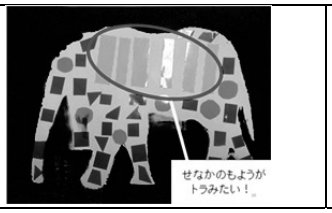


図４

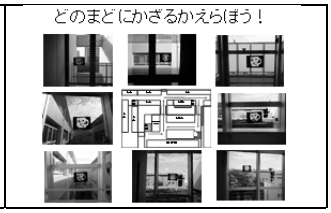


図５

(3)　形や色を目と手で感じる表現教材「クリアシール（ボンド）」づくり

・　模様が描かれた紙のシートをクリアファイルに挟み、その上へボンドとインク（赤、青、黄）を垂らす。ヘラでボンドを混ぜたり、シートに描かれた模様の形に整えたりし、シールの作成をする。自分の感覚や行為を通して、形や色に対する意識を高める。

(4)「表現」と「鑑賞」をつなぐ「振り返りシート（ＰＦ）」

・　自他の試作品の鑑賞後に振り返りを行い、「見て・感じた」ことを完成作品の表現活動に生かすことをねらいとした。

・　試作品と完成作品がどう変容したのか、何を頑張ったのか客観的に変化を見て感じられるようにし、美術の作品づくりを通して、生徒が豊かな表現ができたと実感できることをねらいとした。

４　検証授業

(1) 授業の概要（平成 30 年 11 月に実施）

都立特別支援学校中学部第２学年25名を対象に、表現と鑑賞が相互に関連した学びを取り入れた題材「すてきなまどかざりをつくろう―ステンドグラスの彩りを生かして―」を行った。授業の概要は**表２**に示すとおりである。

表２　検証授業における題材の指導計画

次	時	領域	主な学習活動
第一次	第１時 第２時	鑑賞①	○ＩＣＴ教材を使って対象物の造形的な要素（形・色・光等）を拡大するなど着目し易くして鑑賞する。
		表現①	○様々な形や色のシールを使いせいぶつシルエット（試作品）へ模様を付ける。 ○形や色を感じるためのクリアシールを作る。
第二次	第３時 第４時	鑑賞②	○自他の試作品を鑑賞して得た作品づくりへの手掛かりを基に、完成作品の制作へつなげる（振り返りシートの活用）。
		表現②	○様々な形や色のシールを使いせいぶつシルエット（完成作品）へ模様を付ける。 ○「振り返りシート（ＰＦ）」を活用し、頑張るところを意識した制作を行う。
第三次	第５時 第６時	鑑賞③	○「振り返りシート（ＰＦ）」を基に自分の頑張ったことを発表する。 ○ＩＣＴ教材を使って「展示の場所や仕方」に見通しをもつ。
		表現・鑑賞	○完成した作品を選んだ場所の窓へ展示して、鑑賞する。

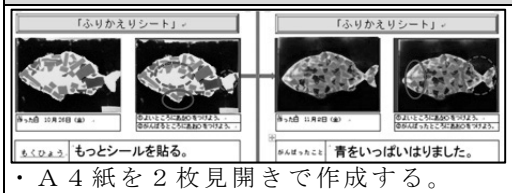
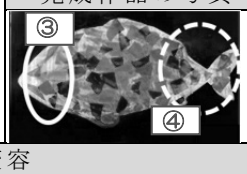
(2) 検証授業の分析

ア　「振り返りシート（ＰＦ）」を活用した生徒作品の変容について

鑑賞の時間において、「振り返りシート（ＰＦ）」を作成した（**表３**）。生徒の実態等に応じて「一人で作成する」か「教員と一緒に作成する」か、二通りの方法を用意した。

目標を設定することで、生徒が作品の完成に向けたイメージを深めることができ、指導や支援をしている教員ともイメージを共有しながら円滑に制作することができた。

表３　「振り返りシート（ＰＦ）」の活用の様子と変容【○よいところ ●頑張る・頑張ったところ □目標・頑張ったこと】

「振り返りシート（ＰＦ）」	試作品の写真	試作品の自己評価
		○「細かくシールを貼った箇所」（図中①） ●「空白部分」と「大きなシールが貼られた箇所」（図中②） □「もっとシールを貼る。」
・Ａ４紙を２枚見開きで作成する。 ・試作品の写真を左側のページに２枚貼り、評価する。 ・完成作品を右側のページに２枚貼り、評価する。	完成作品の写真	完成作品の自己評価（図右側）
		○「青いシールを細かく貼った箇所」（図中③） ●「青いシールを細かく貼った箇所」（図中④） □「青をいっぱい貼った。」
「振り返りシート」活用による生徒の変容		
・はさみを使ってシールを細かくし、作品全体に貼れるように工夫ができた。 ・魚の尻尾まで青いシールを貼り、満足感をもって完成作品を見つめ味わうことができた。		

イ　表現と鑑賞が一体となった展示活動を通した「造形的な見方・考え方」の育成

題材のまとめでは作品を展示し鑑賞をした。生徒が、完成作品（**図６**）を窓に展示をする際、高い場所（**図７**）や低い場所（**図８**）に展示したらどうなるか、友達の作品が無い場所に飾ったらどうなるかなど、展示活動の時間を最大限に使い、試行錯誤する姿が見られた。最終的には友達の作品が多く集まる窓の左上（**図９**）に飾るという選択をした。作品の題名である「明るい太陽」に相応しい展示場所を生徒自ら決めることができた。

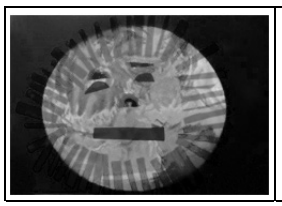


図６　完成作品

図７　展示の様子①

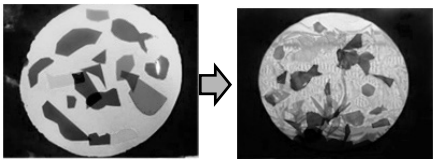
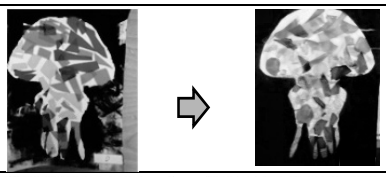
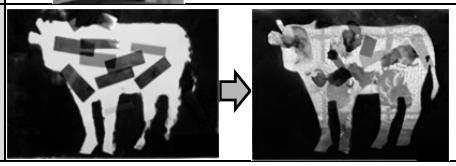
図８　展示の様子②

図９　展示の様子③

ウ　生徒の実態と作品の変容

本題材を通して見られた生徒の作品の変容を実態ごとにまとめた（**表４**）。

表４　生徒の実態（知的障害軽度・中度・重度）と作品の変容　下線部は変容したところ

	試作品　完成作品	作品の変容	
軽度		**○試作品** 丸を金魚鉢に見立て水槽の中を表現した。金魚の形態は簡素なものであった。	**○完成作品** 金魚の形や、水槽の中にあるものである<u>水草や砂利を形を組み合わせて表現するなど、具体的なイメージをもつ形態が増えた</u>。
中度		**○試作品** 使用したシールの色は青、ピンク、黄であった。シールの形は長方形のもので統一されていた。	**○完成作品** 青色を増やしたいという目標をもって制作した。 <u>シールの形に種類が増えている。色の重なりも増えている。</u>
重度		**○試作品** 使用したシールの色は青が中心的であった。シルエットの外にいくつかのシールが貼られている。	**○完成作品** <u>５色のシールがバランスよく貼られた。シルエットを意識して</u>シールが貼られている。

第４　研究の成果

鑑賞を充実させ、その後の表現へと円滑につながるような「造形的な視点」を意識できる教材等や指導を通して美術の作品づくりを行うことで、生徒が造形的な要素に興味・関心をもち、見て感じたことを生かそうと制作に主体的に取り組むことができた。その結果、出来上がった作品に対し、生徒が充実感と達成感を得ることができた。この充実感と達成感は作品の展示へ影響を及ぼし、「ここに飾りたい」という考えを生徒がもつことができた。表現と鑑賞が相互に関連した学びの中で生徒が造形的な要素や創造的な技能等を見て感じ、考え表す場面を連続的に構成することにより、生徒自身の価値や意味を生み出して表せ、考えを深め作品作りに生かした「より豊かな表現」へとつながることが分かった。

第５　今後の課題

本題材において、生徒の実態に応じた指導と支援の方法にさらなる工夫が必要である。造形的な要素を組み合わせて、「具体的なイメージを作る」生徒へは抽象的な型（丸、四角）を用いた制作過程を例示する。また、「形や色の変化を味わう」生徒へは具体的な型（牛、象）を用いた制作過程を例示する。このように作品作りの手掛かりとなるような指導方法を取り入れ、更なる豊かな表現へとつなげることが必要である。